

## 『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂(四)

## 植 木 久 行

●一五〇番 白居易「江樓にて夕望し、客を招く」『風吹枯木晴天雨、月照平沙夏夜霜』

○長慶三年(八二三)の夏、作者五二歳、杭州での作(花房・朱・王)。杭州刺史在任。「江樓」とは、杭州城の南郊を流れて海へとそそぐ錢塘江(浙江)のほとりに立つ高樓の意。南宋の施詡<sup>しぐ</sup>『淳祐臨安志』卷五、舊治古蹟・東樓の條には、「一に望海樓と名づく。舊治(鳳凰山下にあった唐代以來の杭州の役所)の中和堂の北に在り。(北宋の樂史)『太平寰宇記』(卷九三)に、望潮樓と名づく。錢塘縣の南一十三里に在り。樓の高さは一十丈(約三〇メートル)、唐の武德七年(六二四)に置く」とあり、本詩などを引いていう、

案ずるに、白公(居易)の、郡(杭州餘杭郡)に在りしとき、の詩、多く此の樓に<sup>お</sup>いてこれを發す。盡くは載せず。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四(植木)

と。南宋の潛説友『咸淳臨安志』卷五二、府治の條も参照。要するに、江樓とは、東樓・望海樓・望潮樓などとも呼ばれ、杭州城の南端にある鳳凰山の東側、錢塘江を俯瞰する杭州の州廳内にあつた高樓らしい。白詩「杭州春望」(卷20、後集卷5)の自注に、「城東の樓を望海樓と名づく」という。白居易はまた、「東樓南望八韻」詩(卷20、後集卷5)のなかで、「郡中の登樓の處、此の東軒(東樓)に勝るもの無し」と歌う。標高一七八メートルの鳳凰山の中腹<sup>2</sup>にあり、しかもその場所は現在よりもかなり錢塘江や海に近く、それで特に眺望にめぐまれていたのであろう。

ちなみに、北宋の蘇軾にも「望海樓晚景五絶」の作があるが、南宋の初期になると、すでに廢されていた(周淞『乾道臨安志』卷二、東樓の條参照)。なお、唐代の杭州城については、

周峰主編『隋唐名郡杭州』（浙江人民出版社・杭州歷史叢編之二、一九九〇年）の專著があり、卷末に付載する「唐時期杭州圖」も参照に値する。

本句は東樓から錢塘江付近を俯瞰しつつ、聽覺（上句）と視覺（下句）を通して夏の夜の「清涼」（本詩第八句）感を歌う。「夕望」の夕は、ここでは「夜」と同意。夕方をも含んだ夜全體を意味する言葉である。

○〔風吹枯木晴天雨〕類似した發想は、すでに「遺愛寺の前の溪の松に題す」詩（卷17、四七歳の作）に「暑天風瑟瑟、晴夜雨淒淒<sup>(4)</sup>」と見える。また「秋夕」詩（卷10、四十歳の作）には、「葉聲落ちて雨の如く、月色白くして霜に似たり」という。この「秋夕」詩を踏まえての發言であろうか、『私注』に「枯木とは朽木なり。其の葉の落聲、雨に似たり」といい、『抄注』にも「枯木トハ、モミチ（紅葉）タル木歟。落葉ノ音ハ、ハレ（晴）ノソラニモ、雨ノフルトキコ（聞）ユル意也」とある。つまり、風に吹かれて舞い散る落葉の音を、そぼ降る雨のそれに見たてた發想、と考えたわけである。しかし、盛夏の情景として揺落の秋の「落葉」する音を思い描くことは、やや飛躍しすぎているようである。しかも「枯木」の場合、「木」字が狹義の「孤仄」を犯すことになり、一層

好ましくない。やはり、『白氏文集』の各テキストに従って「枯木」を「古木」に校改すべきであろう。柿村『考證』にも「枯字作古、是」という（金子・江見『新釋』も同じ）。鬱蒼と生い茂る、ものふりた大木の枝や葉が、風にざわめいて發する「清涼」な音の形容と見るべきであろう。晩唐の方干「龍泉寺の絶頂」詩（『三體詩』卷二）にも、「古樹は風を含んで常に雨を帶ぶ」と歌う。

ところで佐藤保「古木考」<sup>(5)</sup>は、詩語としての「古木」のイメージを次のように分析する。

- (1) 「古木」の語の初出は、六朝末、陳の何胥「使を被りて關を出す詩」の、「古木上って天に參<sup>か</sup>わる」である。
- (2) 詩語「古木」は盛唐以降愛用されるが、なかでも劉長卿は、この言葉を多用する（18例）。古關や古廟における悠久の時の流れや荒廢の感覺、邊境の寂寥、庭園・山野の雅趣などを傳える働きをもち、それを使用する場所も多様化する。かくて中晩唐期には、詩語「古木」のイメージが完全に定着する。

(3) 「古」は永遠の時の流れを意味する歴史感覺をもつが、「老木」「老樹」の「老」は時間の限定された生命感覺の言葉である。他方、「木」は樹木の總體、または樹木の

樹木たる特性を抽象的かつ概念的に捉えるときに用いられ、「樹」は逆に個々具體的な生命體としての樹木を意識するとき用いる。

と。要するに、白詩に最も影響を与えたであろう作品は、同論文にも引く駱賓王の「張平子（後漢の張衡）の墓に過る」詩の、「日落ちて豐碑暗く、風來りて古木吟る」の句であろう（『駱臨海集箋注』卷二所收）。ただその荒涼・悲涼感に満ちた古木の鳴る音を、夏の暑さを忘れさせてくれる妙なる音に转化させたところに、白詩の工夫があるわけである。

○〔月照平沙夏夜霜〕「平沙」とは、錢塘江の水邊の平らな沙地をいう。「杭州春望」詩（前掲）に「望海樓は明るくして曙霞に照り、護江隄は白くして晴沙を踏む」とあるのによれば、あるいは護岸の白い沙堤を指すか。白沙の水邊が皎皎たる月光に照らされて、より一層白くきらめくのであろう。

一説に、この平沙は「平地」の意とする（顧學頤・周汝昌『白居易詩選』や王汝弼『白居易選集』〔上海古籍出版社、一九八〇年〕など）。釋慈周『莫原詩話後篇』卷三、沙の條には、沙には

「の濱」を意味する用法があるとし、水邊の地を廣く「沙」と表現することができる、と指摘する。津阪孝緯『莫原詩話糾謬』卷四、沙戸の條にも、沙はわが國の「濱」に相當し、

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四（植木）

詩詞ニ淺沙・平沙ナド云ヘルモ、ハマト云コトナリ。スナト云コトニハアラズ。

という。しかし、本句の場合、兩意を含ませたかたちで、水邊の平らな沙地を意味すると考えてよいだろう。

白居易はまた、「東南行一百韻」詩（卷16）のなかで、「波紅にして日斜めに没し、沙白くして月平らかに鋪く」と歌う。これは長江の岸べにある江州（江西省九江）での作、なかでも後句は一面に降りそそぐ月光のために白くきらめく沙地を歌い、本句のイメージとも似かよう。月の光を霜にたとえる比喩は、李白の「靜夜思」の用例が特に有名である。白居易の場合、前掲の「月色白くして霜に似たり」のほかにも、「月は新霜の色を帶ぶ」と歌っている（『酬夢得霜夜對月見懷』詩、卷33、後集卷14）。

○宋の趙令時『侯鯖錄』卷七によれば、蘇軾は本句を、「白公晩年、詩極めて高妙」なる表現として紹介する。<sup>(6)</sup>

●一五一番 白居易「七言十二句、駕部吳郎中七兄に贈る」  
「風生竹夜窓間臥、月照松時臺上行」

○長慶二年（八三二）の初夏、作者五一歳、都長安の新昌坊内の自宅での作（花房・朱・王・羅）。中書舎人在任。「七言十

二句」とは七言排律をいう。白居易はまだ「排律」の呼稱を用いないが、律詩とは明らかに區別される詩型であると認識する。花房英樹『白氏文集の批判的研究』三九一頁参照。「駕部吳郎中七兄」とは、尚書省兵部に屬する駕部郎中の吳丹をいう。駕部郎中とは、「邦國の輿輦・車乘、及び天下の傳驛・廐牧、官私の馬牛・雜畜の簿籍を掌り、その出入・闕逸（遺失）の政令を辨め、その名數を司る」職である（『大唐六典』卷五）。「七兄」の七は、いわゆる排行（前出）。また「兄」とは、白居易の「故饒州刺史吳府君（丹）神道碑銘并序」（卷69）によれば、二十八歳年長の吳丹（七四四～八二五）に對する敬稱である。ちなみに、吳丹は、白居易と同年（八〇〇年）の進士である。字は眞存。若いころから熱心な道教信者であったが、幼い弟や姪たちが飢寒に苦しむのを見かねて仕官したのだという。元和十年（八一五）當時は、繁華な東市に南接する安邑坊に住んでいた（白詩「酬吳七兄寄」卷6）が、八年後の本詩作成時にも同じ場所であったかどうかは定かではない。なお、川口注には、〈文集「早夏 朝より歸り、齋を閉ぢて獨り處る」詩〉とあるが、これは詩題下の原注の一部にすぎない（『文庫』本も同じ）。誤解を招きやすいので改めるべきであらう。

○〔風生竹夜窓間臥〕二句は、白居易が都長安で長慶元年（八二二）二月に初めて購入した新昌坊（長安城內中央部の東端）内の東端にある自宅で、ゆったりとくつろぐ生活を描寫する。本詩の一年前に成る「竹窓」詩（卷11）に、「窓を開いて紙を糊せず、竹を種ゑて行に依らず。意は北簷の下、窓と竹と相ひ當たるを取る」云々とあるのによれば、「窓間」とは、廐舎や庫よりも先に作った「一堂」内の北簷のもとにある、紙を貼らない窓べをいう。なお、同詩にはさらに、炎熱の三伏のとき、朝廷から歸ると、「竹窓」のもとで衣裳をぬぎ、紗の頭巾をかぶる。そして六尺の小さな竹簾の上に臥すと、風があつて一晚中涼しいと歌う。本詩（二五一番）作成の年の秋、都長安から杭州へと赴任する途中で作った「竹窓を思ふ」詩（卷8）にも、その快適さをなつかしんで、こう歌う、「唯だ憶ふ 新昌（坊）の堂の、蕭蕭（風の音）たる北窓の下を。窓間に枕簾在り、來後 何人か宿る」と。

「窓間」の間は、ほとり、そば、あたりの意。窓邊・窓下とはば同意。白詩「池上竹下の作」（卷23、後集卷6）の「食は飽く 窓間 新睡の後」や、「春日閑居三首」（其一、卷36、後集卷4）の「窓間 春睡足る」などによれば、作者は窓べでの睡眠（午睡を含む）を特に好んだらしい。

ちなみに、白居易の竹の愛好は有名である。「樂天と林竹との間には、陶淵明と菊、周茂叔（北宋の周敦頤）と蓮、林和靖と梅の間柄の如き親密さが存してゐた」とは、金子彦次郎『平安時代文學と白氏文集——道眞の文學研究篇第一冊』<sup>(10)</sup>の説である。また堤留吉『白樂天研究』にいう、

白居易はとくに竹と水を愛した。竹の場合、森然たる竹叢、綠濃き琅玕、純白の筠粉、清冷な竹風などを愛したばかりでなく、蕭蕭と玉の相戛つが如き音をたてる竹風、それとともに醸し出す靜閑をも好んだようである。

と（二八二頁）。さらには花房英樹『白居易研究』（世界思想社、一九九〇年再版）も、白居易が驚異的に擴大した歌詩の題材の一つとして「庭前の樹石」をあげ、次のようにいう、

過去においては、多く「潤底」とか「山曲」の松や竹が、文學の題材であり、取り上げるのは、倫理的な情感（四季を通じて變らぬ縁を保つ節操への共感（引用者注）であつた。しかし白居易が頻りに歌うのは、庭前の松と竹であり、しかもその松籟や竹韻が動機であつた。白居易は日常生活における、松竹の風趣を對象とするのである。

と（四七三頁）。本句の場合も、その竹韻を楽しむためであらう。白居易は歌う、「最も愛す窓に近くして臥せば、秋風

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四（植木）

枝に聲有るを」（『新裁竹』卷9）と。『抄注』の「ススミフシタル意」は、この重要な點を見逃しているようである。なお『六注』は、「風生竹夜」の生を「來ル義也」とするが、和訓「生る」（發生する）のままでよい。

○『月照松時』 孟浩然の詩（宿業師山房、待丁公不至）に、「松月 夜涼を生ず」とある。

○『臺上行』 川口譯は「臺」を「臺榭」（『文庫』本では、「四方を觀望できるように作つた高い建物。高どの」と注する）、大曾根譯は「高殿」とする。臺榭とは、一般的に土を搗き固めて造つた高大な基壇、もしくは基壇狀をなす見晴らし臺の類（臺）と、その上に立つ木造建築（榭）をいう。要するに、兩者の譯は『六注』と同じく「月見ノ樓」を想定する解釋である。しかし、岡村繁『白氏文集』四（明治書院、一九九〇年、竹村則行執筆）に「高臺」と譯すほうが妥當である。いかえれば、この臺は建物そのものではなく、地面が高くて平らな場所（高臺）をいう。この問題をもう少し検討しておきたい。同じ新昌坊の自宅を歌つた「庭松」詩（卷11）に、一接するに青瓦を以てし、之を白沙の臺に承く」と歌う。この臺は、明らかに松の生える白沙の中庭を指す。また「新雪二首」（其二、卷28、後集卷10）にも、「唯だ憶ふ 夜深けて 新

たに雪ふる後、新昌臺上の七株の松を」とある。この臺も自宅内の中庭を指すことは疑いない。このほか、「大兄に寄せ上る」詩(卷14)の「獨り荒臺に上つて東北を望めば、日は西にして愁ひ立つて黄昏に到れり」とある「荒臺」は、荒れはてた高臺をいい、決して「高どの」ではない。もちろん、建物を作るときの高大な基壇(土臺)を意味する基本義の用例として、「新たに亭臺を構へ、諸弟姪に示す」詩(卷6)の「平臺 高さ數尺、臺上に茅茨(茅ぶきの亭)を結ぶ」をあげることができる。とすれば、自宅内の中庭を指す「臺」も、じつはこの基壇(土臺)を意味する用法だとも考えられよう。

しかし、本詩句を含めて、新昌坊内の自宅の臺とは、じつはそうした人工的な基壇ではなく、自然のままの高臺、いいかえれば平らな臺地を意味しているらしい。新昌坊内の自宅は、長安城内で最も地勢の高い樂遊原(標高約四五〇メートル)の一角を占めていた。樂遊原とは、前漢の宣帝(前八七〜前七四年在位)を祀る樂遊廟のあつた昇平坊の東北隅を中心としつつ、その周邊(新昌・昇道・昇平・宣平など)にも廣がる高原である。白居易はみずから新昌坊の自宅を、「青龍岡の北 近西の邊り」と歌う(「題新居、寄元八」詩、卷19)。青龍岡とは、

わが空海や圓仁らが相繼いで灌頂を受けた名利、青龍寺のある高臺を意味しており、その位置は前述の樂遊原の南斜面上部にあたっている。白居易の自宅は、その青龍寺から十字街を越えた眞北にあつた。白詩「新昌の新居、事を書す四十韻」(卷19)には、「丹鳳樓(大明宮の丹鳳門)は後に當り、青龍寺は前に在り」と歌われ、都長安の市街地が一望のもとにあつた。

ところで樂遊原付近はまた、月見の名所としても知られ、中唐の楊憑には「樂遊園にて月を望む」詩がある。詳しくは、拙稿「唐都長安樂遊原詩考―樂遊原の位置とそのイメージ」(『中國詩文論叢』第六集、一九八七年)参照。こうして考えてみると、「臺上を行く」とは、月見の名所としても知られた樂遊原の一角をなす新昌坊内の自宅の中庭、もしくは自宅付近での散歩を意味しよう。岡村『白氏文集』四が「月が庭の松を照らすとき」と譯すのは、充分參照に値する。またこう捉えてこそ、本詩の第六句の「舍に歸り門を閉ちて 送迎(送り迎えする客)無し」ともよく呼應することになる。

ちなみに、『抄注』には「下句ハ松臺ノ意也」という。「松臺」という言葉は、じつは二三〇番の白詩に「相思うて夕に松臺に上つて立てれば」云々と見える。これは、修業坊に住

む友人、李建の留守宅を訪れての作である。この修業坊付近も樂遊原に隣接する高臺である。「松臺」とは「松が生えた臺地」（岡村『白氏文集』三の注）を意味するが、より具體的には、この松臺もおそらく、その地が樂遊原に隣接する高臺にあったことを踏まえての措辭であろう。要するに、この場合も人工的な建造物を指しているのではない。

●一五九番 白居易「池上に涼を逐ふ」（二首其一）「青苔地上銷殘雨、綠樹陰前逐晚涼」

○開成元年（八三六）、作者六五歳、洛陽の履道里内の自宅での作（花房・朱）。太子少傅分司在任。池上は池の上り。この池については、一一四番の條參照。逐涼は納涼・追涼・乘涼などともいい、暑さを避け、涼しい場所を求めてすむことをいう。白詩には、「晚庭に涼を逐ふ」（卷19）、「晚涼偶詠」（卷30、後集卷4）、「池畔に涼を逐ふ」（卷36、後集卷17）などの類題がある。古くは梁の徐陵「内園にて涼を逐ふ」詩に、「涼を納る 高樹の下、直坐す 落花の中」とあり、梁の簡文帝蕭綱にも「納涼」「晚景納涼」などの詩が残る。

○「青苔地上」 同じ履道里内の自宅での作「朝課」詩（卷22、後集卷2）の「靜かに掃く 青苔の院」によれば、中庭

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四（植木）

（院）は美しい青苔でおおわれていた。白居易は青苔のおおう風景を特に好んだようである。母の喪に服して退居した下邳の自宅で、「閑歩す 青苔の院」（「秋齋」、卷10）と歌い、都長安の中書省において、「靜（閑靜）は愛す 青苔の院」（「偶題閣下廳」、卷19）などと歌っている。

○「殘雨」『白氏文集』の各テキストでは「殘暑」に作る。「池上逐涼」の主題からいえば、「殘暑」に作るべきであろう。柿村『考證』にも「雨字作暑、是」とある（『新釋』も同じ）。ちなみに、柳瀬喜代志「和漢朗詠集異文考」（前掲）は、「雨上りの青苔の鮮かな色への着目は日本的視覚美による捉えかた」とする。

○「綠樹陰前」「陰前」は「陰中」とほぼ同義。汪立名本には「陰間」に作る。蔣紹愚『唐詩語言研究』（中州古籍出版社、一九九〇年）に付載する「唐詩詞語札記」の「三、邊」の條にいう、

『詩詞曲語辭匯釋』卷一、底四の條に、底には「裏・下・前・邊・旁」などの諸義があるという。「邊」の字も同様である。そればかりでなく、方位を表す言葉、「間・裏・中・内・前」などは、いずれも似た状況をもつ。これは唐詩中の注目に値する一つの現象である。

と。「頭」字もこの中に加えてよい。<sup>(15)</sup> こうした現象はおそらく、これらの方位詞が平仄や對句などの修辭上の制約から、漠然と場所を表わす軽い名詞語尾になった實態と關連しているよう。ちなみに、「中」を意味する「前」字については、蔡鏡浩『魏晉南北朝詞語例釋』（江蘇古籍出版社、一九九〇年）「前」の條參照。一例をあげれば、梁の范雲「送別」詩に「未盡樽前酒」とあり、「樽前」は「樽中」の意。

○「逐晚涼」 木陰<sup>こかげ</sup>での夕涼みをいう。『六注』に、「逐トハ朝スミヲハ木陰<sup>こかげ</sup>（木陰）ノ西ニ求メ、夕涼ヲ木陰ノ東ニ求ムル也」とある。白居易はこのとき、「輕い下駄<sup>げた</sup>をはき單衣<sup>ひとへ</sup>を着て、薄い沙<sup>さ</sup>の帽子をかぶり、浅い池の邊の低い藤棚<sup>はとうり</sup>のあたりを散歩<sup>さんぽ</sup>している（佐久節譯）。「晚涼」の語は、すでに杜甫の詩（與任城許主簿遊南池）に「晚涼 洗馬を見る」と見える。

●一六〇番 白居易「池上の夜境」「露簾清瑩迎夜滑、風襟蕭灑先秋涼」

○大和四年（八三〇）の夏、作者五九歳、洛陽の履道里内の自宅での作（花房・朱）。太子賓客分司在任。池上は前詩（一五九番）と同意。詩題は金澤本に「池上夜憶」に作り、前田

侯爵家所藏傳二條爲氏筆本や岩瀬文庫所藏延慶本などにも「池上夜憶」と題する（堀部正二『校異和漢朗詠集』）。他方、『私注』には「池上夜憶人」に、『六注』には「池上夜涼憶人」に作る。平岡武夫・今井清校定『白氏文集』（第三冊）は、金澤本に據って「夜境」を「夜憶」に校改するが、むしろ「憶」字のほうが「境」の形訛とも考えられる。というのは、本詩の重點は明らかに「池上の夜境（夜景）」を歌うことにあり、「憶ふ」あるいは「人を憶ふ」要素はきわめて乏しいからである（佐久節の譯參照）。

○「露簾」 簾<sup>てん</sup>は、緑の竹を劈<sup>き</sup>き、（その表皮を）編んで作った夏の敷物（竹製のござ）。和名はタカムシロ。熱い夏に寢臺（牀）のうえに敷き、なめらかで涼しい肌ざわりを楽しむ。その心地よい觸感が肌寒く感じられるようになるころ、すでに秋が訪れている。白詩の「露簾 秋意生ず」（「涼夜有懷」卷5）や「秋は簾上より生ず」（「夜坐」卷14）とは、いずれもこの意味である。白居易は、特に「六尺」の小簾<sup>16</sup>を愛用したらしい（前掲の「竹窓」や「招東隣」〔卷7〕など）。

唐代、蕪州<sup>きしゅう</sup>（湖北省東端に近い長江ぞいの地）産の簾が特に有名。韓愈の「鄭群 簾を贈る」詩に、「蕪州の笛竹<sup>（一作簾竹）</sup> 天下知る」とある。白詩「李蕪州に寄す」詩（卷34、後集卷15）

の自注にも、「蕪州は好笛<sup>なら</sup>并<sup>な</sup>びに薤<sup>かいえんじん</sup>葉<sup>え</sup>簾<sup>せん</sup>を出<sup>だ</sup>す」という。薤葉簾とは「滑<sup>なめ</sup>かなること 薤<sup>おおいち</sup>の葉<sup>は</sup>を鋪<sup>し</sup>くが如<sup>ごと</sup>き」(白詩「寄蕪州簾、與元九、因題六韻」、卷16) 感があるための命名である。『廣群芳譜』卷82、竹譜・竹一、「蕪竹<sup>きうく</sup>」の條には、「色の瑩<sup>つや</sup>(光澤)ある者を以て簾<sup>せん</sup>を爲<sup>つく</sup>り、節<sup>まば</sup>の疎<sup>そ</sup>なる者もて笛を爲<sup>つく</sup>り、鬚<sup>す</sup>を帶<sup>お</sup>ぶる者もて杖<sup>つゑ</sup>を爲<sup>つく</sup>る」という。いわゆる蕪竹の三絶<sup>(17)</sup>である。白居易は、この「蕪州簾」を愛用し、友人の元稹にも送っている。本詩の「簾」も、あるいはこの蕪州簾か。

ちなみに、「露簾」は「風櫺」との對をなすことから、夜に入<sup>い</sup>って露<sup>る</sup>の置<sup>お</sup>く簾<sup>れん</sup>をいう(『新釋』參照)。岑參の詩(送永壽王贊府還歸縣)に、「夜深<sup>よるは</sup>けて露<sup>る</sup> 簾<sup>れん</sup>を濕<sup>うる</sup>す」とある。ところが『六注』には、「露ハ、スキトラルトヨム也」という。この注釋は、白詩(前掲の「寄蕪州簾、與元九」)の「清潤宜しく露<sup>る</sup>を乗<sup>の</sup>すべし」の解釋と關連して興味深い。岡村『白氏文集』三は、この句を「露<sup>る</sup>が下<sup>くだ</sup>りたように、清<sup>き</sup>らかで潤<sup>うる</sup>いがあ<sup>あ</sup>る」蕪州簾の描寫とする(三八三頁)。筆者は、「閑夕」詩(卷22、後集卷2)の「筠簾清<sup>き</sup>くして露<sup>る</sup>有<sup>あ</sup>り」の句をも參照して、「露氣がある竹席」(柿村『要解』)とする通說に従う。なお、堤留吉『白樂天研究』にいう、

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四(植木)

白樂天の竹に對する愛は竹で作<sup>つく</sup>ったものにまでおよんでいる。簾・杖・筒などがそれである。青篋簾・碧簾・新簾・枕簾・臥簾・小簾などの語がしばしば用いられているところを見ると、あるいは休憩に、あるいは臥眠に好んで用いたものと思われる。

と(二八三頁)。

○「清瑩」『和漢朗詠集和談鈔』(詩注)に「キヨキ兒<sup>かたち</sup>(貌)」、「抄注」に「キヨクスシケナル兒」とあるが、本來、寶玉のごとき輝きと透明感に満ちあふれた清潤さという疊韻の形容語。白詩(前庭涼夜、卷5)に「露簾 色は玉に似たり」という。「清」の字には、一種の涼感もこもる。ところが「清瑩」の瑩は、金澤本に「熒<sup>けい</sup>」に作り、傳藤原定賴筆山城切や關戶家所藏傳藤原行成筆本などにも「清熒」に作る(『校異和漢朗詠集』)。とすれば、後漢の班固「西都の賦」(『文選』卷二)の「琳<sup>りん</sup>・珉<sup>びん</sup>・青熒<sup>せいへい</sup>たり」などの句が連想されよう。この「青熒」も寶玉の輝きを表す言葉である。平岡・今井校定『白氏文集』(第三册)が、金澤本に據って「清熒」に校改するのも一理あろう。

○「迎夜滑」滑<sup>なめ</sup>らかさと冷やかさが簾の身上<sup>てりえ</sup>である。夜に入ると、降りる露氣のために一層、簾の表面がすべすべする

ことをいう（『新釋』参照）。つまり、「滑」は文字どおり、水気があつてつるつるする意。白詩「秋池二首」（其二、卷22、後集卷2）にも、「晩簾は清くして仍つ滑らかなり」とあり、「夜涼しくして 枕簾滑らかなり」<sup>(22)</sup>の句もある。

○〔風襟〕襟は、いわゆるえりではなく、着物をあわせ、胸もとをふさぐ部分をいう。それで「胸」を意味する引申義や「胸襟」などの熟語が生じてくるわけである。「風襟」とは、風が胸もとをなでる爽涼感をこめた表現。白居易は本例を含めて五例使用する（『索引』）。「新たに亭臺を構へ、諸弟姪に示す」詩（前掲）には、「衿（＝襟）を開いて風に向かつて坐せば、夏日も秋時の如し」と歌う。より古くは、宋玉の「風の賦」（『文選』卷13）の、「楚の襄王酒ち襟を披いてこれに當たる」が有名。

○〔蕭灑〕爽やかで心地よい氣分を表す双聲の形容語。齊の孔稚珪「北山移文」（『文選』卷43）に「蕭灑たる出塵の想ひあり」とあるように、精神的な解放感をこめて用いることが多い。白詩「蘭若（寺院）の寓居」（卷6）に、「行止は輒ち自由、甚だ身の蕭灑たるを覺ゆ」という。『抄注』に「ススシキ兒」、「集注」に「冷やかに身に浸む心」と注するのは、下句の「秋に先だつて涼し」に密着させすぎた嫌いがあろう。

●一六一番 白居易「熱きに苦しんで、恒寂師の禪室に題す」「不是禪房無熱到、但能心靜即身涼」

○元和十年（八一五）、作者四四歳、都長安での作（花・朱『箋校』、太子左贊善大夫在任。「苦熱」には、①酷暑に苦しむ、②酷暑、の兩意がある。「苦熱喜涼」詩（卷10）の「經時苦炎熱」などは①の用例、「苦熱」詩（卷28、後集卷10）の「不堪逢苦熱」などは②の用例であろう。ここでは作者を、「人・暑を避けて 走ること狂へるが如し、獨り、禪師の房を出でざる有り」と歌われる「人人」の一人として捉え（承句の「獨」〔限定〕に注目）、ひとまず通説の①に従う。ただし、西村富美子『白樂天』は「苦だ熱きに、……と讀む。恒寂師は不詳。白詩の同年の作「恒寂師」（「重到城七絶句」其七、卷15）によれば、彼の座禪の師であつた。ちなみに、白詩「恒寂師」に次韻した元稹の詩題には「和樂天贈雲寂僧」とあり、「雲寂」に作る（『元稹集』卷19）。また元稹の「曇・嵩・寂の三上人に寄す」詩（『元稹集』卷19）の一人、寂上人も同一人であろう。「禪室」は詩中の「禪房」の一室か。「題」は題壁（壁に題きつける）の意。五二番参照。なお『六注』には、「此ハ樂天力悟道ノ詩也」という。<sup>(23)</sup>

○〔不是〕 先行の大江維時『千載佳句』四時部・避暑にも

「不是」に作るが、『白氏文集』の各テキストでは一様に「可是」に作る。この異文に關して、岡村『白氏文集』四は、『千載佳句』に據って、

かつて我が國に傳來した『白氏文集』本には、「可是」を「不是」に作っていた本があったことがわかる。

とする。しかし、この發言はやや淺薄な見方であらう。というのは、「可是」を「不是」に作る異文は、じつは「可」の字に「豈」(疑問・推測・反語)を意味する俗語的用法があることに氣づかず、文意を通りやすくするために妄改された可能性がきわめて高いからである。上古漢語では、「可」と「何」は確かに通用したが、唐・五代になると、「可」自體に「豈」を意味する新しい用法が多用されるようになる。<sup>(24)</sup> こうした新興の俗語的用法は後世の人々を惑わせ、「何」に作る異文を生じさせる要因になった。郭在貽『唐詩異文釋例』(『文史』一九輯、一九八三年)には、「後人不曉原文的意思而妄改、從而造成異文」の一例として、この現象をとりあげる。その一例をあげれば、吳融「木塔偶題」詩に、

無限黃花襯黃葉 可<sup>一作何</sup>須春月始傷心

とある(『全唐詩』卷六八六)。傾聽すべき説である。蔣禮鴻『敦煌變文字義通釋』(第四次增訂本)第六篇、釋虛字、「可 豈

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四(植木)

可」の條にも、韓愈「楸樹二首」(其二)の「幸是枝條能樹立、可<sup>一作何</sup>煩羅蔓作交加」をあげていう、

「可、煩」を「何、煩」に作るテキストは、校勘者が「可」の字に「豈」を意味する用法があることに氣づかず、「何」字に改めたものである。語意は通ずるけれども、じつは本来の面目ではない。

と(要約)。「可」のこうした俗語的用法は、外國であるわが平安朝の人々にとっては、より一層理解しにくかったであらう。このことは、五七三番の「可獨終身數相見、子孫長作隔牆人」を、從來「獨り身を終ふるまでに數<sup>(25)</sup>相見るべし」云々と肯定文に讀んできたことに端的にうかがわれる。しかし、この「可獨」は明らかに「豈獨」の意味であり、「可」は「可<sup>あ</sup>に」もしくは「可<sup>べ</sup>けんや」と讀むべきところである(『詩家推敵』卷上參照。ただし、馬本では「何」に作る)。よりくだいて讀めば、「可<sup>あ</sup>に獨<sup>だ</sup>に終身數々<sup>しばしば</sup>相ひ見るのみならんや」となり、結局、「可獨」は「ただ」だけではなく(否定形)を意味することになる。

ところで特に興味深いのは、關戸家所藏傳藤原行成筆本などでは、この「可獨」を「不、獨」に作ることである。中國では、こうした「可」を、「何」に作る異文は多くあるが、「不」

に作る例はほとんどなさそうである。ところが『和漢朗詠集』に収める「豈」を意味する二つ用例の雙方に、「不」に作る異文が存在するのである。豊田穰「唐詩俗語攷」(養徳社刊『唐詩研究』所收、一九五三年)には、唐詩中の「可是」が、

ある場合には「…でせうか、さうではありません、即ち「不是」「並不是」といつた強い否定のことばとして用ひられてゐる。

と指摘し、郭在貽「唐詩中の反訓詞」(『訓詁叢稿』所收)には、この例(可是禪房無熱到)を引いて、「可是猶豈是、亦即不是也」という。(26)とすれば、口語「可是」の意味を正確に理解したうえで、それを意圖的に「同義の文語表現へと書きかえた」可能性(柳瀬喜代志「和漢朗詠集異文考」)も全く否定しきれないが、むしろその意味を把握しかねて文意を通りやすくするために「不是」に妄改した可能性がきわめて高いようである。

大野峻「白樂天の詩『放言』二則」(27)は、この論點について、きわめて注目すべき發言をする。

可・何・不の三字は草書の字形が似ているため混同されやすかつた。(28)昔は寫本で傳承されたのだから、異本が多いのは必然の結果である。ことに草書ともなれば、可と何、

可と不は筆勢によってはほとんど區別がつかなくなる。(中略)可の字が(正しく)讀めない時は、意味の通じやすい、形も似ている「何」「不」に改めようとするだろう。その反對に、「何」または「不」の句は意味がよく通じるから、意味の通じない「可」に改めようとする者はないだろう。

と述べ、「可」「何」「不」の三字間における異文發生の原因を鋭く分析する。そして前掲の五七三番の詩句に着目していう、

不の字は日本の寫本だけにあるのも意味深長である。つまり、「可獨終身數相見」を肯定文としたのでは意味が通じないから、文字の誤りが有ると考え、可の字によく似た不の字にしてしまった。その時の寫本は恐らく草書に近く、可と不がよく似てたのではなからうか。草書字典を見ると、この二字はほとんど見分けがつかないものが見受けられる。

と。きわめて示唆に富む説である。筆者は現在のところ、「不是」は「可是」の妄改であり、中國傳來の寫本に「不是」に作るものがあつたわけではなからうと考える。ちなみに、「可是」の是は、副詞に軽く添えられる接尾辭(副詞語尾)であ

り、「定是」「必是」「若是」「應是」「凡是」「非是」などと同じ。白居易はしばしば「是」字を用いて語を伸ばし二音節化する。花房英樹『白居易研究』四五三頁参照。

○〔禪房〕 恒寂師の修業する禪院。『抄注』に「禪ヲ修スル房也。即チ僧房也」とある。

○〔但能心靜即身涼〕 「但」は、「もし……しさえすれば（こういう結果を招く）」と、必要條件を提示する假定の用法。<sup>(30)</sup>

太田辰夫『中國語歴史文法』には、『只要』は古い白話では《但》といふことが多い」と指摘する（三四一頁）。したがって、こうした「但」は「もし」と讀んでもよい（『詩家推敵』

卷上、『文語解』卷二）。「但……即」は、現代中國語の「只要……就」にほぼ對應する表現である。白詩（贈鄰里往還）卷28、後集卷10の「但能抖擻人間事、便是逍遙地上仙」（但だ能く人間<sup>じんかん</sup>の事を抖擻<sup>とさく</sup>「ふりはらう」すれば、便ち是れ逍遙たる地上の仙）の場合には、「但……便」が呼應する。「便」は「即」とほぼ同意。

能は可能。白詩の「新樂府五十首」の一つ（其四十二）、「官牛<sup>(31)</sup>詩にも、「但能」の語を用い、「右丞相、但だ能く人を濟ひ國を治め陰陽を調へば、官牛<sup>(32)</sup>頸<sup>くび</sup>を穿たる<sup>うが</sup>とも防げ無し」と歌う。つまり、「但能心靜」は「もしも雜念をなくして心を平靜に保つことができさえすれば」と譯せよう。この意味

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四（植木）

で、川口譯に「ただ心を靜かに保つて亂れないので」、大曾根譯に「ただ禪師の心が安靜で亂れないから」とあるのは、「但」の意味を正しく理解していないことになる。<sup>(33)</sup> いいかえれば、本句は、猛暑をよそに平然と座禪する恒寂師の姿に對する直接の賞讃というよりは、むしろ目睹した狀況を踏まえたうえで、より普遍的な「眞理」へと昇華させた、いわば一種の「悟道詩」であると理解すべきであろう。晩唐の杜荀鶴「夏日 悟空上人の院に題す」詩にも、「安禪は必ずしも山水を須<sup>も</sup>ひず、心中を滅得すれば火も自<sup>おの</sup>から涼し」とある。これも、白詩と全く同じ發想である。白居易はまた、「夏日 閑禪師と林下に暑を避く」詩（卷36、後集卷17）のなかで、苦熱の惱みが雜念の消去とともに消えうせる體驗を、「熱惱漸<sup>まさ</sup>に知る 念に隨ひて盡くるを」と歌う。

#### 〔注〕

(1) 『咸淳臨安志』卷十六、「府治圖」参照。

(2) 孔凡禮點校『蘇軾詩集』卷八（中華書局、一九八二年）に收める「望海樓晚景五絶」に對する清の王文誥の注に、「樓在鳳凰山半、故見潮也」とある。

(3) 魏嵩山「杭州城市的興起及其城區的發展」（『歷史地理』創刊號、一九八一年）参照。

## 中國詩文論叢 第十集

- (4) 舊鈔本による。宋版・馬本は瑟瑟を槓槓に、雨を露に作る。平岡武夫「白氏文集における刊本と舊鈔本の間」(『かがみ』十號、一九六五年) 参照。
- (5) 『お茶の水女子大學中國文學會報』八號、一九八九年所收。小島憲之「平安びと漢詩表現の一ふし」―「被白詩圈文學」と「非白詩圈文學」と―(『文學』一九七七年六月號) にも、詩語「古木」への言及がある。
- (6) ただし、清の潘德輿『養一齋詩話』卷三には、「余按此二語殊平淺、非白詩之妙者、不解東坡何以賞之」と反論する。いま、陳友琴編『白居易卷』(古典文學研究資料彙編) による。
- (7) 羅聯添『白樂天年譜』(國立編譯館・中華叢書、一九八九年) の略稱。以下、同じ。
- (8) 朱金城『白居易研究』(陝西人民出版社、一九八七年) 八三頁以下、ウェーリー『白樂天』(花房英樹譯) 二二一頁参照。
- (9) 前掲の蔣紹愚「唐詩詞語札記」参照。
- (10) 講談社、一九四八年刊。二六頁。
- (11) 佐久節譯注本や岡村『白氏文集』三など参照。
- (12) 前掲の「新昌新居、書事四十韻……」詩に「平治遶臺路」とあり、岡村『白氏文集』四には「家の土臺の周圍の道を平らにならし」と譯す。
- (13) 『唐兩京城坊考』卷三、新昌坊の條や、朱金城「白居易長安住宅坊里小考」(『白居易研究』所收)、王拾遺「白居易兩京宅第考」(『社會科學戰線』一九八一年二期・文藝學) など参照。
- (14) 拙稿「唐都青龍寺詩初探」(平河出版社刊『道教と宗教文化』一九八七年所收) 参照。
- (15) 六六番の注参照。
- (16) 韓愈「鄭群贈簾」詩には「八尺」の筧が歌われる。
- (17) 佐久節譯注本第二冊五九七頁など参照。
- (18) 「病中逢秋、招客夜酌」詩、卷8、後集卷1参照。
- (19) 『和漢朗詠集古注釋集成』第三卷所收。
- (20) 『文選』卷八に收める漢の揚雄「羽獵の賦」にも見える。
- (21) 「酬牛相公『宮城早秋寓言』見寄……」詩、卷30、後集卷4。
- (22) 卞孝萱『元稹年譜』元和十年(八一五)の條参照。
- (23) 『和漢朗詠集和談抄』(詩注) には、「悟道詩ト云フ絶句ノ詩ノ落句也」とある。
- (24) 王鐔「試論古代白話詞匯研究的意義與作用」(『文史』二五集、一九八五年) 参照。ただし、唐以前にも若干、その用例がある。『敦煌變文字義通釋』四四七頁以下、劉堅「校勘在俗語詞研究中的運用」(『中國語文』一九八一年六期) など参照。
- (25) 『敦煌變文字義通釋』四五四頁など参照。
- (26) 伊藤東涯『用字格』卷一に、「可是・是可、此ハ不是・是不ト同例ナリ。可是ト云ハ俗語ナリ。文章ニハ不レ用」とい

う。

(27) 『湘南文學』二〇、一九八六年。

(28) 項楚「敦煌變文校勘商榷」(『中國語文』一九八二年四期)には、行書の形が似ているために、「不」を「可」に誤った例を指摘する。

(29) 「可是」の用法や例文については、豊田穰「唐詩俗語攷」(前掲)に詳しい。

(30) 入矢義高「中國口語史の構想」(『集刊東洋學』五六、一九八六年)参照。

(31) 王維「答張五弟」詩にも、「不妨飲酒復垂酌、君但能來相往還」とある。

(32) 霍松林『白居易詩譯析』(黑龍江人民出版社、一九八一年)には、「右丞相、只要你能爲國爲民謀福利、牛領磨破也沒關係」と譯す。

(33) 西村富美子『白樂天』も「ただ、必靜かで居られるから」と誤譯するが、岡村『白氏文集』三には「但だ心を靜かに保つことができさえすれば」と正しく譯す。

(34) 大修館書店で刊行豫定の『續・校注唐詩解釋辭典』において、筆者が詳しく譯注する。

# 〔補注〕

元稹に「清都夜境」詩(清都は都長安の永樂坊にあった道觀の名)がある。この詩は題下の原注によれば、作者十六歳(貞元十

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂四(植木)

年(七九四)から十八歳までの七首の一つである。しかもその冒頭に位置することから推測すれば、十六歳の作であろう(卞孝萱『元稹年譜』)。つまり、元稹詩の「夜境」の用例は、白詩よりも三十五年ほど前である。